

第二五回愛知学院大学
モーニングセミナー

『徒然草』逍遙

―兼好の生活と思想―

愛知県立大学教授
伊藤伸江

2008年4月8日

作者兼好の生涯と 『徒然草』の構成

俗名 卜部兼好

生没年未詳 弘安六年(一二八三)頃
観応三年(一二五二)頃か。

若くして出家、仏道修行をなしたが、
晩年には歌人として活躍した。

関東にも下向の経験があつた。

『徒然草』の成立時期 未詳

近年の研究では、執筆開始から、章
段の編纂、推敲、完成までを長期間に
わたると考えている。

『徒然草』の形式 序段から二四三段ま
での章段。連想によるゆるやかな関
連。

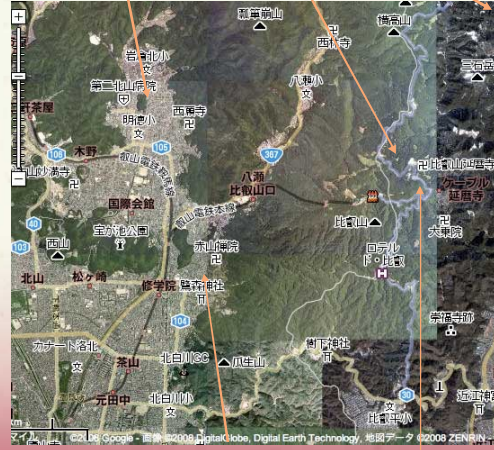
兼好の足取りをたどる

仁和寺

岩倉

西塔

横川



双ヶ丘

修学院

東塔

十九段 折々の美

おりふしの移り変わるこそ、物ごとにあはれなれ。

「物のあはれは秋こそまされ」と、人ごとに言ふめれど、それもさる物にて、今ひときは心も浮たつ物は、春のけしきにこそあめれ。

(中略)

「灌仏の比、祭の頃、若葉の梢涼しげに茂りゆく程こそ、世のあはれも人の恋しさもまされ」と人の仰せられしこそ、げにさるものなれ。

(中略)

さて、冬枯れの景色こそ、秋にはおさく劣るまじれ。汀の草に紅葉の散りとどまりて、霜いと白うおける朝、遣水より煙の立つこそをかしけれ。年の暮れはてて、人ごとに急ぎあへる頃ぞ、又なくあはれなる。すさまじき物にして、見る人もなき月の寒けく澄める廿日あまりの空こそ、心ほそきものなれ。

(後略)

祭の頃



御蔭祭



賀茂の競べ馬



葵の葉

五十段 鎌倉末期の世のさま

応長の比、伊勢の国より、女の鬼になりたるを率て上りたりといふことありて、その比廿日ばかり、日ごとに、京白河の人、「鬼見にて」とて、出でまどふ。

「昨日は西園寺にまゐりたりし」今日は院へまゐるべし」「只今はそこへ」など言へど、「まさしく見たり」と言ふ人もなく、「そら」となり」と言ふ人もなし。上下、たゞ鬼の事のみ言ひやまず。

その頃、東山より安居院辺へまかり侍しに、四条より上さまの人、みな北をさして走る。「一条室町に鬼あり」とのしりあへり。今出河辺より見やれば、院の御棧敷のあたり、さらに通りうへくもあらず、立ち込みたり。「はやく、跡なきことにはあらざめり」とて、人をやりて見るに、大方逢へる物なし。暮るゝまで立ち騒ぎて、はては鬨諍起りて、あさましきこともありけり。

その比、おしなべて、二三日人の煩ふことの侍しをぞ、かの鬼のそら事は此しるしを示すなりけりと言ふ人も侍し。



一五五段 生住異滅のまことの大事

世に從はむ人、先機嫌を知るべし。ついで悪しきことは、人の耳にも逆ひ、心にも違ひて、その事成らず。さやうのをりふしを心得べきなり。

ただし、病を受け、子生み、死ぬることのみ、機嫌を測らず。ついで悪しとて、やむ事なし。生住異滅の移り変わるまことの大事は、たけき河のみなぎり流るゝがごとし。(中略)

春暮れてのち、夏になり、夏果てて、秋の来るにはあらず。春はやがて夏の氣を催し、夏より既に秋は通ひ、秋はずなはち寒くなり、十月は小春の天氣、草も青くなり、梅もつぼみぬ。(中略)

生老病死の移り来ること、又これに過ぎたり。四季は猶定まれるついであり。死期はついでを待たず。死は前よりしも来らず、兼て後に迫る。人みな死ある事を知りて、待つことしかも急ならざるに、覺えずして来る。沖の干潟遙かなれども、磯より潮の満つるがごとし。

『徒然草』の魅力

「内容」

兼好の鋭い観察眼

人間の生の諸相

個性的な人物像の描写

自然の美の発見

兼好の思索

現世を生きる方策

無常の認識

○多面的な対象把握が読者にも
たらず共感と驚き

「文体・表現」

内容に応じた適切な文体

○文のリズムによる音の流れ
章段間の連想のつながり

○章段のつながりと切れとを意識
した多様な味読の可能性